朧月

ほのぼの魁☆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

朧月

【Ｎコード】

Ｎ０９２８Ｐ

【作者名】

ほのぼの魁☆

【あらすじ】

あるお城に使えている青年兵士たちの物語です。たぶん２話目以後はＢＬになるかも。ってか、これあらすじじゃねぇ。

～出会い＋日常１編～（前書き）

初めて書きました？
駄文ですが…
よろしければ読んでいってください（＊^―^＊）

～出会い＋日常１編～

　朧月が弱い光を放っている。そのせいでぼんやりとしか見えない道を俺は一人でさくさく歩く。今俺はムカついている。理由は簡単だ。
俺のクソおやじが１３になった俺を城の兵士見習いにすると勝手に決めたからだ。全く持って不愉快極まりない！俺にだってやりたいことくらいあるんだ。
「くそ！」。そういったとき誰かがせき込むような声がした。時刻は夜中の２時、それにそっちは結構深めの川のはずだ。俺の背中にいやな汗が伝う。…ああ。きっとほら。あれだ。幻聴みたいな。「けほ…っけほ」…沈黙
勇気を出して見るんだ俺！
月明かりを頼りに近づいていく。
「……っ」息が止まりそうになった…。いや。
少しの間とまっていたかもしれない。
俺の前には同じ年くらいのきれいな女の子が倒れていた。
一目惚れだった…
――あれから５年
「あの野郎？今日こそぜってぇー許さねぇ」
という怒声がひびき一人の青年が扉をぶち破らん勢いで出てきた。
　ここは、とある国の城の中にある鍛錬所である。
そして、そこで鍛錬している兵たちはその青年の登場をあきれた感じでみている。
今から始まる物語はある城に仕えている２人の青年の日常物語…かな？

～出会い＋日常１編～（後書き）

ここまで読んでくださった方ありがとうございました（≧∇≦）

日常1編つづき（前書き）

なにぶん不慣れなもので書くのが遅くてすみません。
こんなに遅いのに駄文？申し訳ないっす。

日常1編つづき

「あの野郎？今日こそぜってぇー許さねぇ！」
遠くの方でそんな声が聞こえた気がした。あぁ、言い訳どうしようかな…。と、考え始めてすぐに…

ドタドタドタッ
バァン。

荒々しくドアが開かれた。
そして、俺がドアの方に視線をやるとそこには鬼のような形相で刀を構える美しい青年がたっている。
この青年こそ俺があのとき川で拾ったあの子。あの後、俺はこいつをかついで家に戻った。そして、こいつが男の子だということがわかり俺はがっかり。でも、惚れてることにかわりはないんだけどな。
ちなみに…あれから数日後に2人で兵士見習いになったんだぜ
（無理矢理）
んじゃ、成り行きわかった人少ないと思うけど場面戻っちゃいます。
「落ち着け、ロイ。俺にだって言い分がある！」
あぁ、そうそうあいつの名前はロイって言うんだ。紹介してなかったな。ちなみに俺は…
「超がつくほどのバカで女たらしの…アホだな」
「…」
なぜ俺が心の中で皆さんに紹介してるのがわかったのかは謎だけど。すんごく落ち込む。　「昨日仕事さぼったのは謝ります！だから、自己紹介させてください！（涙）」

「はぁ。」←溜め息

何故に溜め息…？

「とっととしろ。」

「はい。させていただきます。俺の名前はブレイク。」

「よし、済んだな。歯ぁ食いしばれ！」

場所は変わりまして……修練所。

「ギャアアアッごめんなさい！反省してます！ギブギブ！！関節があっ」

と、いう声が聞こえてきました。

それを聞き兵士達は全員「はぁ、またか」と呟くのでした。

「はずれたぁっっ」

「「「「「また関節はずされたんかい！！」」」」」

これが二人の変わった日常なのでした。

日常1編つづき（後書き）

読んでくださりありがとうございました（＊^・^＊）

ゴリラ隊長参上！（前書き）

2人の隊長が登場します（、艸、）

ゴリラ隊長参上！

あの後、左肩の関節をはずされもがく俺の上にロイが容赦なく馬乗りになってきた。そして拳をかまえている！

このままでは危険だと察知し、素早く気合いで関節をはめる（命の危機と頻繁に直面して修得）。そして、ロイを押し倒し上に跨る。形勢逆転完了！と、一息つく。

――次の瞬間

ドタドタドタッバンッ

「「「「「「「「ブレイク！生きてるか！？」」」」」」」」

同僚の兵士達が乱入してきた。

「「！？」」←俺とロイ

「「「「「「「「……」」」」」」」」←同僚達

しばしの沈黙

そして、同僚の一人がその沈黙を破った。

「お前らまだ早いんじゃないか？」←同僚の一人

「なにが早いんだ？」←ロイ

「そりゃあ、ナニだろ」

「お前ら、ロイは純粋なんだよ！」

「てか、男相手に盛るなんて…」

「ブレイク、そんなにたまってんなら俺が可愛いねえちゃん紹介するぜ！」

同僚達が口々に勝手なことを言っている中俺はなにも言えずにいる…。

すると、同僚たちの後ろにちらりとゴリラのようなものが見えた気がした。

ここ、ゴリラ飼ってたっけ…

そう思ったとき、

「くぉら？お前ら何をしとるか？！？」

「げっ？」

そこにはゴリラ……と瓜二つの俺らがもっとも恐れている隊長がたっていた。

「「「「「「「ゴリラ……隊長」」」」」」」

「貴様らぁ？誰がゴリラだぁ？」そういうと、隊長は見事な胸筋を露わに襲いかかってきた。

バッ↑みんなが一つしかない窓に一斉に向かう音

バタン↑ゴリラがドアを閉める音

「俺が先だ！」

「俺だって」

「コノヤロ！」

誰が先に脱出するか押し合ってるバカな俺ら。

「覚悟はいいなぁ？（にっこり）」

ニヤリと笑うゴリラ……

「ギャアアアッ」

つづく。

ゴリラ隊長参上！（後書き）

いつも読んでくださりありがとうございます？
皆さんに読んでいただけることが支えになってます（＊^＿^＊）

地獄の鍛錬（前書き）

いや？？

毎度のことですが、遅くなって申し訳ありません。反省してます？

地獄の鍛錬

只今、俺らはゴリラ隊長主催の地獄の鍛錬を受けている……。

俺らのいう地獄の鍛錬とは――――

まず、ゴリラ隊長と剣で勝負する。そして負けたら腕立てを１００回行う。
これを勝つまで繰り返す……という鍛錬法。

しかし、俺らの中で勝てた奴は一人もいない。

だから、結局飯の時間までみんなしごかれる。

今日もそうなのだ。

みんな絶望感を隠し切れてない。

しかし、２周目に入ろうとしたとき――――――

「よーし！今日はここまでぇッ！！」←ゴリラ隊長

「「「「「「「！！！！」」」」」」」

「まじでか！？」
「よっしゃ～！！」

「ラッキーじゃね？」
と、一瞬の間をおいて喜ぶみんな。
只今俺らのテンションはＭＡＸ！
「しかぁし！」
と、俺らの喜びの声を遮るゴリラ隊長。
そして、ゴリラ隊長の次の言葉でみんなのテンションは急降下する…。
「可哀想だが、みんなが休んでいる間に任務に行かにゃならんものがおーる！」
みんな一斉に目をそらす。
それから沈黙が続く。
あまりにも長いんで俺はついにゴリラの方を見ちまったんだ……。
ちらり↑俺がゴリラ隊長の方を見た
ニヤリ↑俺と目があってゴリラ隊長が笑った
『しまった！』
後悔したのも遅く――――
「みんな喜べ！！勇敢なブレイク君がな、自分がいきます。と、俺に目で訴えてきてくれた！」
「「「「「「「ありがとよ！ブレイク。おまえかっこいいぜ。」」」」

」」」」

――――――――

あれから、みんな礼を言って休憩しにいった…。
そして、俺はゴリラの前にいる…（涙）
なんなんだこの違い。
するとゴリラ隊長が話し出した。
「初任務だな！頑張れよ！まぁ、俺の部隊で散々鍛えたんだ。心配ないよなあ（黒笑）」
「……」
「まあ、緊張するな。任務は2人1組だ。」
そういえば俺のペアは……ロイだった！
「俺行きます！」
「さすがだ！頑張れよ！」
「はい？」
「じゃあ、任務について説明する！今回の任務地はサエラ地方。任務内容はある盗賊の全滅だ！」
「2人でなんて無理だろ」

「ほかの部隊からもでてるぞ。だから、２人だけじゃない！とにかく、行ってこい！」
俺はつまみ出された…

つづく

地獄の鍛錬（後書き）

読んでくださりありがとうございました？
次回は初任務編です。
あと、ブレイクがロイに告白する……カモ。

初任務編（前書き）

遅くなってしまいまことに申し訳ないです。
宿題ためすぎたー。
個人的な理由でごめんなさい。
しかも、駄文ですみません。

初任務編

俺は今、ロイと一緒に任務地であるサエラ地方に向かっている。
サエラ地方は俺らの住むトニュースミア国の中で最も犯罪率が高い。
だから、そこから頻繁に面倒事が舞い込むんだ。
そのたびに、俺ら城の余り者兵士は任務に行かされる。
全く迷惑この上ないぜ。
「はぁ。ため息でちまう…。」

ガツーン！
「いってぇぇ！」
脳震盪起こってるー！？
「ついたぞってんだろ！」
「ごめんロイ。でも、殴るこたないっしょ（涙）」
そう言って、俺は頭をさすりながら周りを見た。
「……。」
ボロボロの建物、飢えた人々、そして、得意げなマッチョのおっさん。

「うん。どうみても犯罪率が高そうな町だ。」と俺はつぶやいた。
「任務の説明書によると、ここはサエラ地方のタニア町と書いてるな」
「ロイ、どうしてそんなに冷静なんだ…」
(前のマッチョ気にならねぇのか！？)

バンッバン
と銃声が響きわたる。
「「…！？」」
町の人々は怯えはじめる。
マッチョのおっさんは俺の背に隠れる……。
「触んじゃねぇ！」
むこうから鉄砲と刀などの武器を持った連中が歩いてくる。
俺とロイが刀に手をかけて構える。
「あいつら、城の奴らじゃねぇか。」
「本当だ。頭、どうしやす？」

「女の兵士はきれいだな！女は生かして男共は殺っちまえ」

「……（苦笑）」↑俺

「……？」

↑ロイ

「…（ポッ）」↑マッチョ

「「「「「おめぇじゃねぇよ！」」」」」

Σ（ □ ）！

「「「「「分かるだろ。」」」」」

「……ッ！　？」

俺の背に痛みが走った。針か何かが刺さったみたいだ。体がしびれてくる…。

「ブレイク！？」

「はっはっはっ。油断したなぁ。」

「ックソ！」

毒か？意識が遠のく……。

「「「「「今のうちに殺っちまえ！」」」」」

「ブレイク！しっかりしろ！！」

もうダメか。こんなことならゴリラと目を合わせなきゃよかった…。

「「「ゴリラ部隊！しっかりしろ救援にきたぜ！」」」

「「「「「「！？」」」」」」

「ちっ！退くぞ！」↑頭

そこで俺の意識は途絶えた……。

――――――

目を開けるとロイがいた。夢かな…。

あぁ。綺麗だ。

「ロイ。俺、昔からおまえのことが好きなんだ」

そういうと、ロイの顔は真っ赤になった。

うれしい夢だな。

「あら起きた？」

ロイの横からマッチョのオカマが出てきた…。

「訂正する。悪夢だ…。」

「何だとおらぁ！（男声）」
オカマから男に戻った…。
オカマに襟を捕まれながら周りをみた。
どうやら宿のようだ。
「やめて下さい副隊長！そいつ怪我人ですよ！」
「あら、そうだったわ」
すんなり離したな。
……ッ！？
「副隊長！？」
俺は思わず驚いた。

「そうよ。私は、」
説明長くなりそうだな。
ロイの反応を伺おうと横を見た。
つか、ロイがいねぇ！
「ロイ知りませんか？」
横の兵士に聞くと、
「あぁ、顔真っ赤にして出てったよ。」
俺は話し続けるオカマを無視して部屋を出た。

初任務編（後書き）

読んで下さりありがとうございました？
皆さんが読んでくれることが励みになるっす！
次回は、初任務完了編です。

初任務完了編（前書き）

大変お待たせして申し訳ありません。こんな駄文ですが、暇つぶしに読んでいってください（＊^＿^＊）

初任務完了編

宿は狭かったのでロイを見つけるのは簡単だった。

ロイは、部屋を出て少しいった廊下のつきあたりにある窓から外を眺めていた。

表情は見えない。

大股二歩くらい間をとって話しかける。

「ロイ、俺は…」

「さっきのは本気か。」

「!?、……あぁ。本気だ。」

しばしの沈黙。

俺は勇気を出してその沈黙を破った。

「こっちを向いてくれ。今からもう一度思いを伝える。それを聞いて正直な返事をくれ。」

ロイがゆっくりこっちを向く。

照れくさそうに。

やっぱりきれいだ…。

しかしその表情がひきつってきた…。

俺の後方を見ているような……。

俺は後ろを見た。

いや、見ようとした。しかしそれは叶わず俺は地に伏していた…。

最後にみたのは、ポカーンとしたロイの顔。

萌！

と、オカマの顔面ドアップ。

最悪だー。

――――――――

俺は再びベッドの上で目を覚ました。

「大丈夫か。」

そこには心配そうな顔をしたロイがいた。

「俺、何でまた寝てるんだ…」

「お前はオカマ部隊の副隊長の自己紹介をしかとしたために制裁を

受けたんだ…。」
「災難だな俺。ところで、任務は？」
「……オカマ部隊が行ってる」
……その時
「今戻りました！」
と、ひとりのオカマ部隊隊員が来た。
「任務は完了したので城にお戻りください。」
「「まじか！？」」
――――――――
「久々の城だー。疲れたなロイ。」
「そうだな」
と、その時
「初任務お疲れだったな！ブレイク、ロイ！」
ゴリラ隊長が登場した…
「おまえ等には一週間の休暇をやる。ゆっくり休めよ。」
「「よっしゃー！」」

初任務完了編（後書き）

読んで下さりありがとうございました？
次回は、ブレイクとロイに進展ありです。

初夜編（前書き）

大変遅くなり申し訳ありません。只今スランプ期でございまして（／￣・、）

とんだ駄文ですが、気が向いたら読んでいってください。

初夜編

只今　ａｍ０：０５。

初任務を終え、ようやくマイルームに帰ってきた。

ボフッと、ベッドに倒れ込み、深呼吸をする。

疲れてはいるけどまだ眠れそうにない。

どうしたもんかな…。

ロイに会いに行きたいけど、告白したばっかだし…行きにくい。

コンコンッ。

考えていると控えめなノックが聞こえてきた。

「誰だろ…。」

こんな夜中に…。

もしかしたら、お化け？

…まさかね（＜｜＜；

いや、でもこんな時間だ。

どう考えても夜勤の兵士以外寝てるだろ…。

でも、誰か眠れないから話しとこうぜ、って来たかもしんねぇし。

しかたねぇ勇気を出して扉を開けろ、俺。

ガチャッ。

そして…

「お化けなら！この札を食らって、成仏しやが…ってロイ？」

そこにはお化けはいなかった。

がしかし、ものすごい呆れ顔の…ロイがいた。

「話したいことがあったから来たんだが…寝ぼk」

「けてないから！全っ然大丈夫だから！さっきから眠れなくてさ。ちょうど話し相手がほしかったんだ。だからさ、そんなこと言わずによってけよ。」

「……あ、ああ。そうか。じゃあ、邪魔させてもらう。」

こうして、部屋にロイを招き入れ、２人でベッドに腰掛けた。

「「……。」」

しかし……。

何を話したらいいんだぁ！

こんな時に全く思いつかねぇ！

どうする！

考えろ、こんな時こそ知恵をふり絞るんだぁ！

できるだけ会話の弾むような話題は…。

俺が頭の中でいろいろと叫んだりしていたとき、ロイがゆっくりと口を開いた。

「あ、あのときの告白の返事をしよう…と思ってきたんだ。」

「へぇ。…ま、マジで！」

す、ストレート。

どきどきする。

ヤバいよ。これ。

「お、俺は」

ロイは頬を真っ赤にして話し続ける。

「お前のこと嫌いじゃない。それにどちらかというと、す、好きな方だ。お前が良いなら…その、付き合いたい！」

そこまで言ってロイは下を向き、口を噤んでしまった。

俺はというとトマトみたいになってしまっている。

うれしい、ＯＫもらえちゃったよ。

「そ、それだけだ！じゃあな。」

ロイはそういって退室しようとする。

しかし俺は退室しようとするロイの腕をつかみ、こっちにグッと引き戻した。

が、思いっきり引きすぎてロイはベッドの端につまずき、ベッドの上に倒れ込んだ。

俺はというと、ロイに覆い被さるような感じ…。

この体制だと、真っ赤になったロイに見上げられるかたちで目があう。

これは…なんだか危ない。

見上げられてるし、上に覆い被さってるし…。

ロイも抵抗しないし…。

このままじゃ、俺の息子が起立す……駄目だ、耐えろ、耐えるんだ
俺の息子。
襲ったら関節をはずされるかもしれん。
…いや待て、にしてもロイは抵抗してこない。
と、いうことは襲ってもいいんじゃ…。
イヤイヤ、無いって。
もしかしたら、ん～。
ダメもとで聞いてみるか。
「あ、あのさロイ。抵抗しないと、俺、勘違いして襲っちまうぜ。
いいのか？」
シーン…。
て、抵抗なし。
いいのか、これ。
襲っても。
ああ、そんなに真っ赤になっちまって。
許可？もでたし襲っちゃいましょうか。

俺はロイに激しいキスをしかけた。

初夜編（後書き）

読んでくださりありがとうございました？皆さんが読んでくださることで励みになります。

初夜編つづき（前書き）

大変遅くなり申し訳ありません。ちなみにこれは裏になります。１８歳未満の方は逃亡した方が…（ちなみに毎度変わらぬ駄文。）それでも読んでくださる方がいらっしゃいましたら…どうぞ（・∀・）つ

初夜編つづき

只今キスの真っ最中。

ロイはさっきから苦しそうに顔をしかめている。

でも、必死に舌を絡めてきて。

なんか、そのがんばってる感にドキドキする。

「…はっぁ」

気の済むまでロイの口内を堪能し、唇を解放する。

ロイはというと、荒い息を吐きながらくったりとしている。

頬はほんのり紅くて艶やかだ。

なんかもう我慢していられない。

据え膳食わぬは…みたいな。

ロイの着ているTシャツを捲り上げ、胸の突起を露わにする。

それは、かわいらしいピンク色で白い肌の上にのっていた。

「んぁっ」

思わず指で摘むとロイの口からかわいらしい声が漏れた。
それに俺は気をよくして、
夢中でロイの胸の突起を弄る。
「…ぃや、だ…あぁっ…ブ…レイクっ」
そんな色っぽい声で言わないで欲しい。
逆に止まれなくなる。
「ロイ…好きだ…愛してる」
そう耳元で囁きながらロイが着ている隊服のズボンのベルトを抜き取り、ボタンをはずす。
そして、一気にロイからズボンと下着を剥ぎ取った。
「？…／／」
「ロイ、綺麗だ。もっと触りたい」
「っ／／」
そういって俺はロイの自身に触れた。
「あっ／／ゃあ／／」
ロイが感じてくれてる。
俺の手で。

うれしさを感じながらロイの自身を扱いていく。
「あっゃ…ぁあああ／／」
ロイは絶頂を迎えると頬を染めくったりとしてしまった。
俺はロイの放った愛液を指にとりロイの蕾に塗りつけた。
「ひゃっ！…ど…っこさわって…」
「どこって、ロイのココで繋がるんだぜ。」
「そ…そうなのか…？」
「知らなかったのか…？」
俯いてしまうロイ。
爆発寸前な俺の自身…。
「ロイ。もしおまえが嫌ならここでやめる。」
「…ゃ……な…ぃ」
「？」
「…べ、別に…いやじゃねぇよ。」
「！！」

「じゃあ、続き、してもいいのか？」

「…おまえ、がしたいなら」

「じゃ、いただきます」

――――――――――――

「っ…くぅ…ん」

ロイの蕾に指を一本挿して解していく。

すんごく狭い。

こんなに狭いのに俺の息子がお邪魔するなんて大丈夫だろうか。

ロイの中にある指を曲げたり抜き差ししてみる。

それを繰り返していると、ある一点を掠めた。

瞬間――

「…っぁあ…んっ…なに」

ロイがいきなり甘い嬌声をあげた。

それを聞いた俺は夢中になってその一点を刺激し、指を増やしていった。

指三本が入ったところで俺は指を引き抜いた。

「っんぁ／／」

そして頬を染めるロイの蕾に俺の息子を当て、一気に貫いた。

「っ……ぁぁあああ」

ロイの中は熱くて、俺の息子をきゅうきゅうと締め付けた。

それに耐えきらずに俺は律動を開始した。

「やぁっ…ブ、レイク！…もっと、ぁ、ゆっくりぃ」

「っも…ぁあ、イく！」

「ひぁ……っぁあああ」

「っく」

俺らはほぼ同時に果てた。

そして誘われるように深い眠りに落ちていった。

初夜編つづき（後書き）

読んで下さりありがとうございました。裏は初挑戦だったのでまだまだ未熟ですが…バンバン書いてがんばります（殴

今回のように更新が遅くなり皆さんに迷惑をかけるといけないので。

これからは後書きで次話を更新する日付をお伝えします。

次回は７／２５に更新いたします。

ちなみに次回は休暇編です。

休暇編（前書き）

遅くなりまして申し訳ありません（＊｜＊；毎度の駄文に変わりなし…。ですが、読んでくださるという心の広いかたはどうぞ（＾Ｏ＾）

休暇編

カーテンの隙間から朝日が降り注ぎ、俺を夢から現実へ誘う。

只今、ＡＭ６：２０。

二度寝を、と思いながらも俺はゆっくり体を起こした。

一度大きく欠伸をしてからカーテンに手をかける。

さわやかな朝だ。

ふと隣をみると、ロイがベッドの上で惜しげもなく裸体をさらしている。

体のあちこちには昨夜俺がつけた紅い痕がたくさん散っている。

その痕をみて昨夜のことを思い出し顔に熱が集まる。

その熱を冷ましたくて、窓を開けようとした…その時、

「「「「「ブレイク！助けてくれぇぇ！」」」」」

「！！」

ドアの方から助けを求める声がした…ゆっくりドアに歩み寄り外の音に集中する。

「開けてくれブレイク！このままじゃ俺らは地獄の鍛錬行きなんだ

！」

「そうだ！同僚だろ！友達だろ！助け合わねぇと！」

「……。入れてやりたいところなんだが今日は無理だ。」

「頼む、開けてくれ！もう時間がねぇんだ！それともあれか…？女でも連れ込んでんのか！？」

「マジで！？」

「…。」

（いや、男を連れ込んでます☆なんて言えねぇよな。）

必至に口実を考えていると、

「さぁ、鬼ごっこは終わりだ…。（ニヤリ」

ゴリラ隊長が参上した。

ガシッ

「「「「「離せぇ！ゴリラ野郎！一人で鍛錬でも何でもやりやがれ！！」」」」」

「「「「「ゴリラは大人しくバナナでも食ってろ！！」」」」」

ドアの前で同僚たちがゴリラ隊長に捕まったらしい。

「ブワッハハハハッ！！お前らぁ…ゴリラッテイウノハオレノコトカァ」

「「「「「…！なぜ片言！怖ぇよ！…」」」」」

「クックック！今日という今日はたっぷり礼儀を教えてやる（黒笑」
↑ゴリラ

（（（（（ヤバい！逃げねぇと））））））

「……ご愁傷様。」

ゴリラ相手に至近距離で逃げるのは…無理だろうな。

「「「「「ぎゃあぁぁ」」」」」

逃走に失敗した同僚たちは叫び声が遠のいてるし連行されたようだ。

ため息をつきつつ、ベッドの方をみる。

「……／／／」ロイが居る。

俺の部屋のベッドの上に……。

昨日は確か任務から帰ってきて……。

それから……／／／。

想いが通じ合ったんだ。
何だか嬉しさがこみ上げてくる。
「…ロイ。」
未だに眠る君に目覚めのキスを――
と、近づけた唇をペロリと舐められた。
「／／／…起きてたのか」
「あれだけ騒がれてたら…さすがにな」
俺もロイも昨夜のことを思い出し、赤面。
今までこういう関係になることをずっと夢見てきた。
休暇をもらった6日間はロイと町にでも出かけようかな…。

ドンドンドンッ
「「！！」」
「お前らそのままでいいからよく聞け。」
（（ゴリラ隊長！？ってか、お前らって！？））

「実はな、一週間後に隊長会議があるのだがそこに隊員を二名連れて行かんとならん。」

「「…。」」

「そこで、俺の部隊からはお前らを連れて行く！以上だ。」

「「えーっ！！」」

つづく。

休暇編（後書き）

読んで下さりありがとうございました。

次回は８月もしくは９月になります？

波乱の予感！？隊長会議！（前書き）

大変お待たせしました。えーっと（＋＿＋）今回も相当にひどい文です。毎度反省しております。

それでも、読んでくださる方どうぞ（　・∀・）つ

波乱の予感！？隊長会議！

あれから一週間。

隊長会議にでることになった俺とロイ。

あまりにも緊張してしまって、ろくに休暇を過ごせなかった…。

そしてついに会議当日。

―――只今会議１０分前

俺らはすでに会場にいた。

目の前には巨大な長方形のテーブルがある。

その両サイドには椅子が約５メートルおきに３つずつ並べられている。

ゴリラ隊長は左サイドの一番後ろの椅子に座っている。

そして俺らはゴリラ隊長の後ろに控えている。

「「……。」」

「お前ら、そう緊張するな。他の部隊のやつにあまく見られるぞ。」

「「……ハイ。」」

「まあ、そうは言っても無理か。」

「「…。」」

「とりあえず、今日は王子と大臣方が会議をご覧になるそうだからな。凛々しくしていろ。」

（凛々しく、かぁ。）

俺はふと隣にいるロイを見つめた。

綺麗な金色の髪。

その間からのぞく真っ白な項。

うっすらと色づく唇。

どこも色っぽい。

今すぐに押し倒して、めちゃくちゃに愛してしまいたい。

と、俺が危ない妄想に入っていこうとしたとき

「あんらまぁ、ロイ君とブレイク君じゃなぁい。」

今まで楽園だった視界は一瞬のうちに地獄へと。

「ぎゃぁぁああ！化けものぉ！」

思わず俺は叫んでしまった。

それに驚いたロイとゴリラ隊長がこちらをみる。
そして、そこにいるオカマ隊長を見てゴリラ隊長が溜め息。

「はぁ。やはりお前かぁ。その顔でいきなり視界にはいってやるな。心臓に悪いだろ。」

ビキッ。

「どういう意味よ。久々に会っておいて失礼ね…あぁ、もしかして私の顔が美しすぎるからかしら。」

「「「ちげぇよ。（ボソリ）」」」

ブチィッ。

「なんだと！ゴラァァ！」

（（（普通に男じゃねぇか…。））））

オカマが男と化したそのとき、

「そこ！そろそろ席に着くべきでしょう！」
と、女性の凛々しい声が響いた。
声の先を見ると巨乳の黒髪美人がいた。
隊長服をきている。
すげぇ。
女の隊長もいるんだな。
と、巨乳隊長を見つめていると足に鋭い一撃が入った。
「☆＃＆＊％※！」
俺はもはや訳の分からない言葉を叫んだ。
横を見ると俺の足にキツイ一撃をお見舞いした張本人ロイは目をつり上げてこちらを見ようともしない。
俺なんかしたか？
してねぇよな！
ったく！！
「おい！！ロイ！話聞けよ。俺なんかしたか！？」

俺が小声でそう訪ねると、ロイは頬を少し赤らめて、何でもないと返してきた。

「静粛に！では、これより隊長会議を始める。」

その声に、はっとして周りをみると６つの席はすべてうまっていた。

右サイドの一番前から、オカマ、巨乳美人、じいさんの順に並んでいる。

左サイドの一番前からナルシ、ロボット、ゴリラの順に並んでいる。

「要するに左サイドには変な奴が……」

俺が小声でそういいかけると、どぎつい睨みが三人からとんできた。

二階席をみると、偉そうにふんぞり返ったおっさん共が口から食べ物のくずを飛ばしながら喋っている。

そして、その後ろでいかにも俺が王子ですけどと言うようにふんぞり返った黒髪の若者がいる。

ったく、何だってんだ。

ブチィッ。

ん？

何か横から音がした。

横を見ると、ロイが額に怒りマークをつけ、後ろに阿修羅のオーラを出している…。

ヤバい？これヤバいよね。

ロイが食べながらしゃべるのが嫌いなのは知ってる。

でも、さすがに大臣とかを怒鳴ったりしねぇよな…。

すると、ロイは何かを叫ぼうとするかのように息を吸い込む。

ヤバい！

そう思った俺はロイを引き寄せてキスを仕掛けた。

舌を唇の間から差し入れロイを翻弄していく。

「んっ、んー！」

最初は、少し抵抗していたロイもどんどんおとなしくなった。

目が潤んできたところで俺はロイを解放した。

どうやら隊長や大臣たちは会議の方に集中してるらしい。

バレなくてよかっ…たぁぁぁぁ！

「いだだだだっ！腕っ腕がもげる！ちょっ、なんで！？」

「こっこんな場所で…あんな…こと…っ／／／反省しやがれ！」

グギギギギ。

バキョッ！

「ぎゃあああ！かっ、関節がぁ！」

「「「「「「「「「……」」」」」」」」」

隊長や大臣たちがこっちをみている。

びっくりしてるよ。

そりゃあ、びっくりするよな。

後ろで叫び声がして振り向いたら兵士が関節をはずされてた。なんて。

そのとき、ナルシスト隊長が口を開いた。

「あぁーあ。やだねー。君の部隊はいつでも暑苦しすぎるよ。君にそっくりでね。あぁ。可哀想に…。」

ビキッ。

「貴様はいつでも女々しいんだな！男のくせに毎日鏡ばかりみおって！」

「男でも身だしなみには気を配らないといけないんだよ。……ゴリラの社会は知らないけどね。」

「誰がゴリラだ！このナルシストが！！」

2人が言い合いを始めたとき巨乳隊長がボソリと言った。

「元恋人同士でそんなに喧嘩しなくてもよろしいと思うのですが…。」

（（（（（。д。；））））

周りの空気が一瞬凍る。

そして、

「「「「「「……えええェェェェェェ！！」」」」」」

一気に爆発した。

「「何でばらすんだぁ！？」」←ゴリラ＆ａｍｐ；ナルシ

「ダメだったのですか（笑」↑巨乳隊長

（（（（（（（……。）））））））

もはやこの空気はどうしようもないな。

どうにかできたらすごい。

――――――――

結局、あのあとの複雑な空気は直しようがなかった……。

だから会議も早々に切り上げることになった。

今回の任務はある方の護衛だそうで、任務には巨乳隊長部隊、ロボット隊長部隊、ゴリラ隊長部隊の３部隊が任務に就くことになった。

３部隊も動員するなんて相当偉い人を護衛するんだなぁ。

このとき、俺らはまだ知る由もなかった。

今度の護衛任務が相当に大変なことを。

波乱の予感！？隊長会議！（後書き）

読んでくださりありがとうございました。

なんだか最近スランプ期でして（T＾T）

すみません。

護衛任務開始！！（前書き）

遅くなりました！ってか、無駄になげぇΣ（ □ ）！

なんだか、最近行き詰まってます。どうイチャつかせたらいいのやら…。

こんな駄文ですが暇な方、どうぞ（ ・∀・）つ

護衛任務開始！！

――――――ＡＭ８：００（出発１５分前）

護衛対象人物を乗せる馬車が用意された。

なんと貴族が乗るような馬車を。

素晴らしい造りだ。

結構お偉い方が乗るんだな。

俺らが馬車を夢中になってみていると、

俺の隣にいたロイがよろめいた。

誰かに押されたらしい。

俺はロイを支えつつそちらを睨むように見た。

そこにはあの黒髪の王子がそれはもう偉そうに立っていた。

あーっ！すんげぇ、むかつくっ？

俺がバカ王子を凝視していると、

「そのように男同士で抱き合うな。気持ち悪い。」

との、一言。

ブチィッ！！

殴っていいかなぁ！？こいつ！

俺の堪忍袋の緒が切れそうになっていたとき、バカ王子の後ろから一人の人物が出てきた。

そして、その人物は俺とバカ王子の間に割って入った。

フード付きのマントを着ていて顔は見えない。

「兄上。馬車にどうぞ。出発が遅れれば野宿になります。」

兄弟？

「兄と呼ぶなといっているだろう！汚らわしい！」

なんだか、かなり怒っているな。

「申し訳ありません。…以後気をつけます。とにかく、馬車にお乗りください。」

王族同士なのに主従のような関係に見える。

バカ王子が馬車に乗った後、その人物はこちらを振り向いた。

そして、俺とロイを見て謝罪するように頭を下げた。

「すまない。気を悪くしないで欲しい。」

その人物が顔を上げたとき、俺とロイは、はっと息をのんだ。

その人物の顔は中性的で、まるで女性のようだった。

それは、ロイと同じくらいに。

銀色の髪と、アメジストのような紫色の瞳が印象的だ。

「私の名は春蘭（しゅんらん）というんだ。道中よろしくな。」

――――――

草木に挟まれた道を馬車が通っていく。

その横にぴったりと付きガラガラ、ガラガラという馬車の音を聞く。

この馬車の中にはあのバカ王子が乗っている…。

そして、何故か春蘭さんは歩いている。

馬車には乗らないのだろうか。
王族なのに。
それにしても護衛対象人物ってどんな奴なんだろう。
王子が付いて来るほどだろう？

俺が考えていると、ロイが左方向を指さしながら言った。
「ブレイク…。あいつら、どうにかしなきゃだよな。」
俺がそっちを見てみると、お馬鹿な同僚達が巨乳隊長の胸をみながらデレデレしていた。
うわー…（汗

だが、巨乳隊長はその視線には目もくれず俺とロイの方に寄ってきた。
「あなた達は付き合っているのでしょう？」
その言葉を聞いとたんに、ロイの顔が真っ赤になった。
もちろん俺も。

すると、その言葉が聞こえたのか春蘭さんも寄ってきた。

「お前たち…付き合っていたのか。」

すると巨乳隊長の視線が俺とロイと春蘭さんを行き来する。

「あらまぁ！素敵！！両手に花という感じね。」

いきなり巨乳隊長のテンションが上昇した。

そして、俺の方を向き、

「もちろん君が攻めよね！あぁ、すごいわ！兵士同士！なんていい設定なの！」

と言いながら、紙にメモしていく。

（（（……。））））

俺、なんて返したらいいんだ。

はい、もちろん攻めです、なんて女性の前で言ったらダメだよな。

そのとき巨乳隊長のさらなる爆弾発言が……。

「名前はロイ君…と、ブレイク君よね。夜はどう？どの体位が好みなの？」

紙とペンを持って接近してくる。

どうしよう（汗

その時、

「攻めとか体位とか何の話なんだ？」←春蘭さん

……。

巨乳隊長が春蘭さんを見る。

「この顔で未経験なの！？いいわ！すごくいい！攻めって言うのは…」

「「わああぁぁ！」」

春蘭さんに巨乳隊長が説明するのを阻止できた。

ロイは春蘭さんに違う話題をふり、俺は仕方なく巨乳隊長にロイとのことを話す。

えー！まだ1回しかヤってないの？とか、すんごくわざとらしいことを言って、いろんな体位を説明してくる。

最初は聞く気のなかった俺も目的地に到着した夕方頃には、すっかり関心していた。

素晴らしいものばかりだった。

今度、ロイとの夜に役立てよう！！

目的地はとてもにぎやかな町だった。

レンガでできた大小さまざまな建物が印象的だ。

町の入り口には［ようこそ！サエラ地方ソルトレー町へ］と書いてあった。

変な名前の町だ。

というか、ここもサエラ地方か…。

初任務地の町はいかにも犯罪率が高いですよ、って、感じの町だったけど…。

ここは平和そうだな。

その時、

ガシャーン！

バリーン！

「ふざけやがって！この若造がっ！！表にでやがれ！今日こそ絞めてやる！」

道の左側にある酒場で問題発生。

…。前言撤回。

絶対平和じゃない！

しかし、隊長達は素通りする気満々だ。

「ゴリ……いえ、隊長！止めないんですか？」

「ただの喧嘩だ。放っておけ。それより、今は護衛対象人物を捜すんだ。」

「でも、歳とか格好とか分かんないと…。あと、一体、なぜその人物を護衛するんですか？」

「実は、近隣の国々と戦になったときの備えとして軍師を迎えることになったんだ。その人物は他国にも人気があってな…」

すると、その問題の酒場から出てきた2人を見て、隊長たちが固まる。

いや、正確には2人の内の1人を見て、だ。

４０代くらいと２０代位の男。

軍師なら４０代くらいだと思うけど…。

隊長たちは２０代くらいの男をみてる。

「今度こそ許さねぇぞ！！よくも人の」

「女を寝取りやがって、ですか。聞き飽きましたね。もっと、レパートリーというものが持てないのですか。」

聞き飽きるほど寝取ったのか……。

「うるせぇ！てめぇの女癖の悪さ町中に言いふらしてやるからな！！」

「…はぁ。……これだから童貞は。女々しいですね。ここは男らしく素手で勝負といきませんか。」

ビキィッ！

「望むところだぁぁぁ！」

そういって殴りかかろうとした４０代の男の拳をひらりとかわした軍師と思われる人は、相手の鳩尾に拳を打ち込み、相手をノックアウトした。

そしてニコヤカにこちらを振り向き、軽くお辞儀をした。

「遠路はるばる…ご苦労様です。（ニコリ」

顔やスタイルはモデル並だ。

銀色の長い髪を低い位置でひとまとめにしている姿も魅力的と言える。だが、先ほどのことからいくと、このひとは腹黒い！

ほんとにこの人が軍師でいいのだろうか。

――――所変わって宿

軍師様とも合流出来たわけで、只今宿にある食堂でみんな食事中。

全員疲労を回復しようと、食事にがっついている。

ただ、バカ王子だけはご機嫌斜めだ。

軍師様が弟である春蘭さんに話しかけているからだろう。

「おや、男性なのですか。いや、残念。それにしても…あなたの髪の色は母譲りですか？」

そういって、軍師様は春蘭さんの腰に腕をまわした。

「はぁ。そうだが。どうかなされたのか。」

「っ！！そうですか。……おっと。少々目眩が。…少し休みたいので、部屋まで付いて来てくださいませんか。」

「！！…それは大変だ。部屋はどこに？」

（（まさかな…。襲ったり、しないよな？））↑ロイと俺

「吐き気とかはあるのか？」

「無いですけど…。体のある部分が熱くて…ですね。」

（（襲う気だぁあああ！止めないと…））

「ロイ、ブレイク！ちょっと来い。」

まさかの呼び出し。

空気読め！ゴリラ！

話が終わった頃には春蘭さんと軍師様の姿はなかった。

護衛任務開始！！（後書き）

読んでくださりありがとうございました（＊^＿^＊）

次回は１１／０９に更新いたします。

入試がありますのでこの日になりますが、ごめんなさい（＜＿＞。）

軍師の真実　※R18（前書き）

遅くなりましたぁぁぁ（＊´д`＊）

亀並みの更新ですみません（＊__＊；

今回はR18？なので、不愉快だぁぁ！と、いう方は逃げてください！！

それでも、暇つぶしにと思って読んでくださる方は…どうぞ（・∀・）つ

軍師の真実　※R18

――――軍師の部屋

（春蘭ｓｉｄｅ）

ギシリ、と宿屋のベッドが安っぽい音を立てる。

気分が悪くなった軍師を部屋までつれてきたが、こんなに安っぽいベッドで体に障らないのだろうか。

毛布でも借りにいこうか。

私がそんなことを考えていると、

「すみませんね。わざわざ付いて来させてしまって。」

軍師が笑顔で謝罪してきた。

「あぁ。気にすることはないさ。」

笑顔で返し、軍師の顔をじっと見つめてみる。

顔色は良さそうだし、いたって問題は無いようにみえる…。

これなら、一旦離れても大丈夫か。

「ちゃんと、休んでいるのだぞ。私は一度食堂に戻って兄上の様子を見てくるから。」

笑顔でそう言って私は踵を返した。

すると、

「……何故、あなたはっ……」

後方から怒気をはらんだような低い声が聞こえた。

その声に恐怖を感じ、すぐに振り返ろうとしたが、すでに遅かった。

思い切り後ろに引かれて、背中に衝撃が走る。

いつの間にか、ベッドの上で軍師を見上げる格好になっていた。

「…？なにを…？」

軍師はその問いには答えず、私の腕を縛りあげ、ベッドと繋いだ。

「ぁ…っやめ…むぐっ！」

恐怖に声を上げかける。

しかし、布のようなものを口に押し込まれ、部屋の外に声が届くことはなかった。

「暴れないでくださいね。もし、暴れたら……お仕置き、ですよ。」

ふっ、と妖しい笑みを浮かべて軍師は言った。

背筋を冷たい感じが通っていく。

あっという間に着ているものが剥ぎ取られていき、生まれたままの姿にされる。

あまりの羞恥に耳まで赤くなる。

「あぁ、可愛らしい。食べてしまいたいくらいに、ね。」

そういって右胸の突起に強く吸いつき、左胸の突起を引っ張ったり押し潰したりしてくる。

「っふぅ…うっ」

「おや、痛い方がお好みですか…。下、濡れてきていますよ。」

否定のために必死で首を横に振る。

「違うのですか？だったら、自分の目で確かめていただかなくては。」

ぐいっと足を抱えられ、嫌でも自身が視界に入る。

「もっと感じさせて、ぐちゃぐちゃにしてあげますよ。…おっと、そろそろ口を自由にしましょう。可愛い声で喘いでくださいね」

そう言って軍師は私の口を解放した。

そして、自身に舌を這わせてきた。

「あっあぁ…んぅ…っやぁ！もっ、だめ。」

「ダメ、じゃないでしょ。こんなに濡らしておいて。感じている証拠じゃないですか。」

グチュグチュと恥ずかしい音がする。

なぜこんな辱めを受けなければいけないんだ。

「あぁ！やっ…なんか出る！くっ…ちはなっして」

「ふふっ。出していいですよ」

そう言って思い切り、先の方を吸われた。

腰がビクビクと震える。

「あぁぁぁっ！」

ビクビクッビクン

「たくさん出ましたね。では、そろそろ…」

ぐいっと足を頭の横まで持ち上げられた。

「なっ／／／やめろ！こんなっ…いっ」

グチュリと音がして異物感に声を上げる。

「うん、イったおかげで少しは解かれていますね。」

この体勢のせいで自分の中に軍師の指が入っていくのが見える。

「いっや…も、抜いてっくれ！」

「いやですね。それより、2本目いれます、よっ。」

グチュリ

「あぁ！っ…うぅ…く」

もはやあふれ出す涙がとめられない。

すると一瞬だけ軍師は悲しそうな顔をした。

そして絞り出しようにして呟いたのだ。

「っ泣かないで、」

と。

しかし、突然はっとしてまた態度を戻した。

「泣くくらい気持ちいいのでしょう。あなたは痛い方がすきですもんね。」

「ちが…っ」

「違わないでしょう。それでは、本番にいくとしますか。」

「ほん…ばん？」

脚を持ち上げられ、軍師の肩に掛けさせられた。

「力を抜いて、ゆったりしていてください。」

熱いものが宛てがわれたと感じた次の瞬間、体を裂くような痛みが走った。

「ぃっ！ぁあああ！！」

痛い痛い痛い痛い痛い！

何故、こんなことをされなければならないのか。

涙で視界が利かない。

あまりの痛みに意識が遠のいていく。

するとそのとき温かい手が頬をなでた気がした。

そして、意識を手放す寸前にみえた軍師の顔は泣きそうにも見えた。

何でおまえが泣くんだよ。

どうして傷ついたような顔をするんだよ。

なぜ私を見る瞳に悲しさが込められているんだ……。

――――――――

（軍師ｓｉｄｅ）

萎えてしまった自身を引き抜き、春蘭様の手を縛っていた縄を解いたあと、体をきれいに拭いていく。

それにしても、この方の容貌はあまりにも姫君様に似すぎている。

こんなにも似ているなんて思わなかった。

こんなにも似ている方に刃を向けられるはずがない。

だが、１８年前の出来事を無かったことには出来るはずがない。

――――――１８年前

あのとき俺はまだ６才だった。

死にかけていたところを姫君様に救われ、あの人を親のように慕っていた。

しかし、姫君様は嫁ぐことになり、離れることになってしまった。

「姫君様、幸せになってくださいね。僕、勉強をがんばって世界一の軍師になります。そして、姫君様のいる国でお勤めしますから。」

「まぁ。本当に？がんばってね。待っているから。翼龍（よくりゅう）、言ったからには途中で投げ出してはだめよ。」

そう言って姫君は俺をぎゅっと抱きしめてくれた。

優しい花の香りが今でも脳裏によみがえる。

それと同時に姫君の頬を涙が伝ったことも。

後から聞いた話、姫君の輿入れの条件はトニュースミア国が故郷を保護することだったそうだ。

しかし、姫君がトニュースミア国に輿入れしてから2年。

我々の一族は虐殺されてしまった。

しかもトニュースミアの者によって。

奴らは約束を破ったのだ。

大金を掴むために。

俺達は成人するまでアメジストのような紫色の瞳を持ち、成人した後その瞳は銀色に変わる。

また、心臓には不老不死の効果があるという噂がある。

瞳も心臓も相当な価値をもつ。

そのために、瞳と心臓は高額で取り引きされる。

１６年前、女子供問わずに一族は皆殺しにされた。

亡骸からは瞳がえぐり取られ、心臓も抜き取られていた。

あの日、幼かった俺は友達と探検をしていた森の中で、うっかり眠っていて助かった。

友達は突然いなくなった俺を捜しに村に戻ったのだろう。

俺が村に戻ったときには息絶えていた。

生存者を探して一日中歩き回った。

足はズキズキと痛んだ。

頭の中は真っ白だった。

叫び続けて声はかれ、泣き続けて涙もかれた。

あまりの絶望感に命を絶とうともした。

だが、姫君のことが頭に蘇りそれは叶わなかった。

姫君が生きている、それが唯一の救いだった。

しかし、最近になって掴んだ情報で俺の希望は打ち砕かれた。

姫君は一族が殺されたその日に殺されていた。

俺は人生を終えようと思った。

だがその時、頭に死んでいった友人達の顔が浮かんできた。

オレガシンダラ、ダレガアイツラノムネンヲハラス？

そんな疑問が浮かんできた。

だから俺は、トニュースミア国に復讐する。

一族と姫君の無念を晴らすために！

王の一族を皆殺しにする！

軍師の真実　※R18（後書き）

読んでくださりありがとうございましたε＝ヽ（＊~▽~）ノ

皆さんが読んでくれるからこそやる気が起きます（＊^＿^＊）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0928p/

朧月

2011年11月15日18時48分発行